



地球荒廃は 人間のおごり

会長 鈴木 末一

世界 132 カ国の政府が参加

する「生物多様性及び生態系サービスに関する政府間科学政策プラットフォーム」(IPBES)が5月上旬、パリで開催されました。人類の活動によって約100万種の動植物が絶滅危機にさらされている、と警告する報告書を発表しました。

自然環境は地球上のあらゆる場所で、かつてない速度で衰退しており、最大の原因は人類の食糧とエネルギー需要が拡大し続けているからだと言われています。IPBESは、衰退の動きは食い止めることができるものの、それには人類の自然への関わり方が全面的かつ「抜本的に変化」する必要があると結論づけています。1800ページに及ぶIPBES報告書は、3年間にわたり研究調査して得た1万5千点の資料を集大成したものです。私たちの農作物を受粉させるハチ、土壌に水を蓄え洪水を防ぐ森林など、人間の活動そのものが自分たちの社会を支える自然環境を破壊している様子を明らかにしています。「政策決定者のため」として、パリ会合で発表された40ページの要約は、地球にしか住む場所のない人類が、いかに地球を荒廃させてきたか、かつてないほど厳しく糾弾をしています。確かに歴史上、人類は常に地球環境に影響を与えてきたものの、かつてはかすり傷程度にしか過ぎなかったのが、過去50年の人間活動によって地球環境が負った傷は極めて重傷であり、深刻だと要約は指摘しています。

1970年以来、世界人口は倍増し、世界経済の規模は4倍に成長し、国際貿易の量は10倍に増えました。膨れ上がる人類に十分な食料と衣類とエネルギーを与えるため、各地で森林が驚くほどのペースで切り倒されてきました。特に熱帯地域の森林が、とてつもないペースで減少しています。1980年から2000年の間に失われた熱帯林の面積は、1億ヘクタールにも及ぶとか。南米での牧畜と東南アジアのパーム油生産が、その主な原因のようです。森林よりさらに破壊の度合いがひどいのが湿地帯で、1700年にあった湿地帯のうち

2000年にも残っていたのは13%に過ぎないとのこと。各国で都市部は急速に拡大し、都市地域の面積は1992年から倍増しました。人類のこうした活動によって、かつてないほど大量の生物種が死滅しています。

報告書は、動植物の25%の種が絶滅の危機にさらされていると指摘しています。昆虫への地球規模の影響は分かっていますが、地域によって昆虫が急速に激減している様子は詳しく記録されているようです。様々な現象を総合して、IPBESは約100万種の動植物が数十年のうちに絶滅するであろうと警告。この絶滅のペースは過去1000年の平均より10倍から100倍速いといわれています。

報告書の統括執筆責任者の1人、米ミネソタ大学のケイト・ブラウマン博士は「生物多様性と自然が本当にかつてないほど衰退している様子を記録した。衰退のペースや脅威の規模という意味で、人類史上このような現象はまったく前例がない」「すべてを並べてみたとき、生物種の衰退があまりにひどくて、自然環境が人間に与える恩恵がどれほど失われるのかを見て、衝撃を受けた」と博士は言っています。

地球上の土壌もかつてないほど劣化しているため、地表の生産性は23%も後退しているといわれています。人類の飽食によって巨大なゴミの山が積み上がり、プラスチック公害は1980年から10倍に増え、私たちは毎年、3億~4億トンもの重金属や溶剤、有毒ヘドロなどの廃棄物を地球の海や河川に投棄しているとのこと。

これほど多くの生物を絶滅の危機にさらしている要因は複数ありますが、報告書によれば土地利用の変化が主要因だとしています。要するに、草原を集約農業の耕作地に切り替えたり、原生林を農園に変更したり、耕作のために森林を伐採したりする活動を意味しています。こうした土地利用の変化は世界各地で、特に熱帯地域でさかんに行われています。1980年以来、農業生産拡大の半分以上は原生林の破壊によって実現したのです。

「子孫から借りている自然だから」を、私たちは忘れてはなりません。